

安心な未来社会をつくりあげるための政策を協働で考察することにより 現代社会を見つめ直す社会科授業の実践

福井大学教育地域科学部附属中学校 塚 田 勝 利

安心な未来社会を約束するために必要な政策は何か。同じ問題意識や理念を持つ者同士が政党をつくり、選挙活動や政党討論会を通して、政策を協働で練り上げていく。現代社会の特色をとらえ、安心な未来社会をつくりあげるための政策を協働で考察することにより、今後の日本社会のあり方を探っていく。これから始まる公民的分野の学習に対して、課題意識を醸成し意欲を高めていくことができるようにする試みとして、平成23年5月から6月にかけて、本校3年生を対象に社会科公民的分野（単元「現代社会と私たちの生活」）において行った。

キーワード：現代社会の特色、安心な社会、主体者意識、持続可能、政策評価シート

1 学びの構想

なぜ安心な未来社会か、今、未来社会を探る意義

戦後の日本は、豊かで快適な生活を求め、企業も個人も同じ方向へ向けて走り続けて高度経済成長を遂げた。それに対して現在の日本は人口減少と高齢化が進み、国も国民も従来の成長路線を問い直さなければならなくなっている。そんなときに起こった東日本大震災と原発事故は今までの常識が通用しないことを多くの国民に体験を通して知らせた。空気のような存在の電気・水・食料が当たり前のものではなかったこと、潜在的なリスクとの説明で済んでいた原子力発電の事故を抑え込むことに失敗すれば甚大な被害を及ぼすことが明らかとなった。今回の震災は阪神大震災と比べても被害の規模ははるかに大きく、原発事故が絡んでいるため、将来不安は拭えない。将来の安心に関わる領域は広く、雇用、子どもを産み育てる環境、医療と健康、老後と介護、環境とエネルギー、国防・警察、世界との共生貢献など様々であるが、目ざすべきモデルがない中で、国（政府）と国民が手を携えて安心社会像を模索し構築していくことが求められていることは共通している。安心な社会とはどのような社会か。安心な社会をつくりあげるために必要な政策は何か、社会システムやライフスタイルの転換を含めて新しい国づくりが求められている。

公民的分野の導入単元として

「現代社会と私たちの生活」の単元では、私たちが生きている現代日本の特色を理解することをねらいとしている。しかし、政治、経済、人権、国際社会など広範にわたる現代社会を網羅できるはずはない。ここでは、公民的分野の導入部として位置づけられていることから、より現実的な問題である課題を自分たちの問題として身近に感じながら解決していく学習を展開していくこと

で、これから始まる公民的分野の学習に対して意欲を高めていくことが大切だと考えている。特に、よりよい社会をつくりあげるために必要な政策を考え続ける態度、引いては主体的に社会参画していく手がかりをつかませたいと考えている。そこで本単元では、安心な未来社会をつくりあげるための政策を実現する過程を疑似体験する中で、子どもたちが考えた政策を評価シートを用いて協働で検討することにより、現代社会の特色と課題を見つめ直し、日本の未来社会像を描いていく授業をデザインした。この実践を輝男の学びの姿をもとに、これから検証していくことにする。尚、輝男は個人やグループの探究学習において、根拠をもとに自分の考えを表出することが多い。（※以下に出てくる子どもの名前はすべて仮名である）

2 学びのストーリー

(1) ライフスタイルを考えることで、未来と自己をつなぐ (第1時)

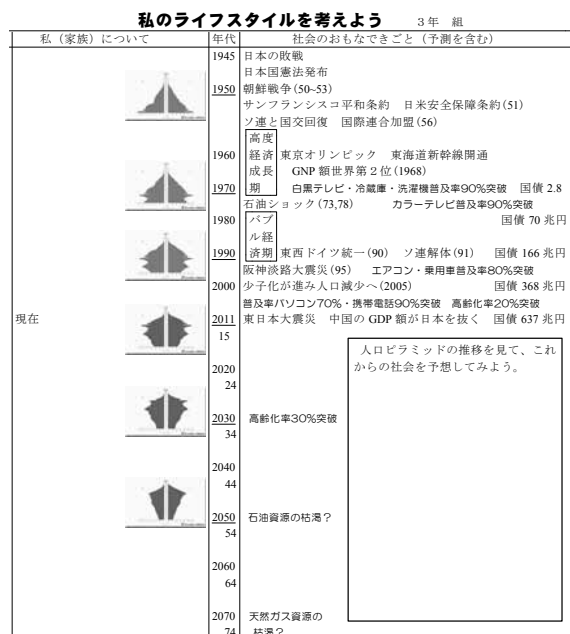
「現代社会は…なので～な社会である」と子どもたちは現代社会の特色を表現していった。輝男は「情報を得た者が得をする情報社会」と表現し、現代社会を「情報化」と「格差」の側面からとらえていた。他にも、「携帯電話やインターネットが使えて快適な社会」「格差が激しい社会」「誰でも最低限の生活ができる社会」「災害があっても不安定な社会」など、子どもたちが抱えている現代社会像は多様であり、肯定的にとらえているものもあれば、将来への不安や解決すべき課題を内包しているものもあった。

教師：5, 6年もすれば、みなさんは大人になる。さらに、就職、結婚、子どもの誕生、50年後には高齢者。その頃には、日本の社会はどのように変わっているんでしょう。逆

に過去にさかのぼって50年前から現在までの社会の変化を見つめることで未来社会を予測できるかもしれません。

子どもたちは年表を見て、人口構成、耐久消費財の普及率、国債の推移、食料・エネルギー自給率の低さや中国の躍進、阪神淡路大震災や東日本大震災を確認し、これからの社会を自分のライフスタイルと合わせて予想した。

輝男は、「2022年に消費税を25%にするものの、2024年に再び大震災の発生、2030年日本財政破綻のため福祉医療費を全額自己負担、2058年に労働力人口の割合が全体の半分に。さらには2042年中国が日本を侵略し、2047年に第三次世界大戦」などと、破局的な終末が到来することを予想した。また、50年後には孫もいて、寿司とスポーツが好きな誠治という名の男の子を考えた。



[ワークシート 私のライフスタイルを考えよう]

子どもたちの未来の予測には飛躍的な発想も見られたため、日本の年齢三区分別人口の推移を見て、少子高齢化を視点にこれからの社会を改めて予想することにした。その際に、考えやすいように「医療費」「税収」「景気」などのキーワードを提示した。これにより、高齢化率の上昇により社会保障費の増大、消費の抑制、税収不足、国債増加。少子化により生産年齢人口の減少、労働力不足、生産や消費の低迷などの社会への今後予想される影響を大まかに確認することができた。

(2) 安心な未来社会を実現するために予想を立て、解決方法を考える (第2時)

前時の宿題である「自分たちの孫に安心な未来を約束できるか。約束するために必要な政策は何か」に対して輝男は「財政破綻」を理由に「どちらかというと安心で

ない」社会になるだろうと予想し、消費税の増税によるベーシックインカムの導入を政策としてあげた。

[illegible]

「モニタリング表 未来は安心か」

クラス全体を見ると、「安心」2名、「どちらかという
と安心」3名、「どちらかというと安心でない」17名、「安
心でない」12名であり、多くの生徒が未来に安心感を
持てないと感じていた。政策としては人口(18名)、経済・
財政(21名)、資源・エネルギー(23名)、教育・福祉・
労働(7名)、震災復興(5名)、政治(4名)、つながり
の構築(1名)など多くの領域にまたがっていた。(複
数回答あり)

輝男はモニタリング表（子どもの認識を視点・観点ごとに教師が分類し視覚化した資料）を見て、「僕は、経済や財政の視点ばかりだけど、雇用やつながりなどの視点もあるんだなあ。また、僕と同じように未来に安心できない人が多い。このまま何もせずにいるのではなく、現在何かでできることがないのだろうか」と感じた。

生徒：安心な社会って、どんな社会ですか。安心と安全は違うんですか。

教師：生活の中で、どんなときに安心を感じた？

生徒：うーん、日頃意識することはあまりない。

教師：逆に安心でない社会って、どんな社会ですか？自分が抱いている安心な社会のイメージを確認するためにウェビングマップを描いてみましょう。

このやりとりを聞いて、輝男は「安心でない社会って何だろうと考えていくことになり、逆なことが安心な社会なんだってイメージがより広がっていった」と振り返っている。

ては赤、課題がもたらす影響については青、課題の原因と背景については黄の付箋に書くようにした。そのときの三人のやりとりは以下のものであった。

輝男：社会福祉を十分に受けられることは安心につながると思う。
公二：社会福祉に限定するんじゃないくて、もっと広くとらえた方がいいと思うな。消費税を一律アップにすると、食料品など生活に最低限必要なものを経済的に苦しい人は買えなくなってしまう。それではいけないと思う。
輝男：社会権を保障するとか。
公二：うん。その方が多くの人の安心につながる。

将来の社会のために財政を安定化させる必要性を感じていることは3人とも共通している。しかし公二は、現在の社会の中で一番困っている人が幸せに生活できることを保障することが政府の役割であり、財政安定化のためとはいえ消費税を増税することで「食料品など生活に最低限必要なものを経済的に苦しい人が買えなくなってしまう。」ことはいけないと考えているのではないか。だから「社会福祉を十分に受けられる」ではなくて、「社会権を保障する」という表現で公二は納得している。こうして自分たちの考えにあてはまる言葉を協働で吟味していくことによって、考えをより明らかにしていくことができた。

また、輝男が記入した赤の付箋（「選挙での人気取りだけ」と「法案が通らない」）の横に、皆子が赤の付箋を貼り付けた。そこに記入されていた「民主主義に対する満足度が低い」と「政治への信頼度が低い」がOECDの各国との比較調査によるデータと分かり、自分の考えをさらに確かにすることができ、自分たちの政党の政策にもりこんだ。次はこの3人の政党で考えたものである。

- 政党名 政治財政を安定させ社会権を最大限保障する党
●課題が国民生活に及ぼす影響 借金の増大により日本が破綻
●政策 政府への信頼を高めた上で消費税増税
[輝男の班で考えた政党名、政策など]

次に、教師が作成した政策評価シートで、輝男たちは自分たちの政策を以下のように検討した。

その政策は実行可能か、解決可能か	政策によって生じるメリット	政策によって生じるデメリット
メディアと協力することによって政府への信頼が高められる。	国民の生活環境の向上(年金、介護、公共事業の充実)	消費税増税により消費・経済の落ち込み

このように「その政策は実行可能か」の観点で検討することで、「政府の政策自体が悪いのではない」→「政府の政策の目的や内容が国民に伝わる」→「政府への信頼が高まる」→「政策の実行が可能である」と考えをつなげていった。こうして政府への信頼を高めるためにはメディアと協力することが必要であると輝男たちは考えた。

(5) 党首討論会で演説、採決へ (第8時)
ア 他の班の考えと比べることを通して自分たちの主張の論拠を明らかにする

他政党との討論会で自分たちの考えを根拠をもとに主張するために、自分たちの政策のメリットやデメリットを確認する作戦タイムをとった。

輝男：消費税の増税は、一時的にはちょっと落ち込むかもしれないけど、長期的に見たらメリットが大きい。消費税増税しますよと言ったところで経済は上がっていく。
皆子：(黙って、軽くうなずく。)
輝男：5%のうちに買っておこうってなるじゃない？
皆子：うん、なるほど。
輝男：お年寄りも多くなるし、財源が必要だよ。国民の生活環境が向上すれば長期的に見れば経済は上向いていく。

このように輝男が根拠をあげて消費税増税後の流れを説明し、二人もそれに納得しているようだった。この後、「三人っ子政策」を掲げる政党（5班）と討論会をすることになった。あらかじめ議論の対立点がはっきりと出てきそうな政党同士を教師側で組み合わせた。この二つの政党は、少子化対策の財源をどうやって担保するのか、消費税増税が実現可能かが論点になると考えた。

- 1 班 政府への信頼を高めた上で消費税を増税する。
2 班 消費税アップ
3 班 停止できる国の事業を一時停止し消費税をアップする。
4 班 個人情報を入力するサイトを規制する。
5 班 3人っ子政策（3人目のみ大学まで教育費を国が負担、医療費を高校卒業まで負担）
6 班 育児休業を夫婦どちらも取らなければいけない。
7 班 保育施設数を増やし、3人以上の子どもには子育て手当を支給する
8 班 仕事を早く終わり家族一緒に夕食をとり、家に広いスペースをとり、家族の交流を深め、投票をコンビニでできるようにし、政治的にも精神的にもつながりを深める。
9 班 原発の安全性を高め国民の信用を取り戻し、原発運転を続ける。
10班 医師数を増加させる。

[班ごとの政策一覧]

こういった作戦タイムの後行われた、1班と5班の討論会において、次のようなやりとりが行われた。

輝男：なぜ三人目のみか。一人も子どもをつくらない人がでてこないのか。
和輝：財源の問題があるから、すべての子どもに補助はできない。それと、子どもの人数を増やしたいから。子どもが一人や二人というのは、



けっこうある。

和輝：メディアと協力するって、どうやってするの？

輝男：税金の使い道の透明化とか、そういったことを伝えることによって国民の信頼が高まると思ったから。メディアを使って、どんどん発信していく。

この後、5班の別の人たちと討論していた皆子が帰ってきて、次のようなやりとりとなった。

皆子：消費税を上げた上で3人っ子政策だからさ。

輝男：5班は「消費税を上げて～」というけど、それ自体がめちゃくちゃ大切な政策なんだよ。

皆子：5班にはそれを言えばいいか。他に3班は国債を減らせば経済が安定するっていうけど逆じゃない？

公二：税金をばんばんとすることになるから、逆に不安定になる。そんなこと言ったら僕らもだけど。

皆子：全部の政党の政策が、私たちの消費税増税をやってからじゃないの？

公二：そうだね。

5班の主張は私たちの増税ありきの主張ではないか、つまり、各班の政策を行う根幹には私たち（1班）の主張である増税による財源の確保が必要になってくるのではないかということを皆子が言った。皆子は、自分たちの政策にやりがいが出てきたのではないかと思う。また、公二も輝男がいるのでわざわざ自分で説明しなくてもいいだろうと感じていたのか終始受け身だったが、皆子が戻ってきてから積極的に政策討論をしていた。政党内での仲間意識が生まれていたようである。他の班に対して自分たちの政策を主張することで、客体で他人から主体で自分のことと思考のチャンネルを変える場面があったのではないか。

イ 自分たちの主張をわかりやすく他に説得する

いよいよ最終演説。各政党は、課題が国民生活に与える影響、政策で生じるメリットとデメリットなどをもとに説明していった。他の政党と比べて自分たちの主張の良さを説明する党首もいた。輝男はすべての政党の演説が終了してから説明したいと主張したが、他との兼ね合いでできなかった。しかし、消費税増税が景気に与える影響の時系列的変化をグラフ（ホワイトボードに記入）で説明した。採決の結果、惜しくも次点となり残念そうであった。それは、自分たちの主張に自信を深めていったからだと思う。



（4）自説をレポートにまとめる（第9時～10時）

豊かな社会保障を実現し、住みよい安心な未来社会を目指したい。そのために、国債の増大という日本の深刻な現状を考えて、

税収の増加を最初に考えた。つまり、消費税を増税したり新税を導入したり…。しかし、政治が信頼されていない状況では反対されて実現できない。だから、まずは政治への信頼を取り戻すことから始めていかなければならないと考え直すようになった。

現在の政治には、総理大臣が次々に代わる、ねじれ国会、国民の人気取りを優先する、実行力のなさなど多くの課題がある。では、政治をどう変えればいいのか。具体的には情報の食い違いをなくすこと。例えば、原発事故の際の東京電力と原子力安全保安院とで。他にも増税したときの税金の有効な使い道を国民に知らせることで理解してもらえらると思う。また、低所得者にとっては、少しの増税でも困るだろう。だから、消費税なら生活必需品の税率を他よりも低くすることで負担の軽減ができると思う。そういった低所得者への影響を減らす仕組みづくりを考えることで、国民から信頼され増税を実行できる。

さらに国債を少しずつ返済し、国民の社会保障の充実をはかりたい。雇用を生み出し、年金・医療を充実させることで、住みよい日本をつくっていききたい。（輝男）

〔輝男のレポート（抜粋）「安心な未来社会をつくりあげるためにはどうしたらいいのか」〕

レポートの読み合いをして、これまでの学習を振り返る

「増税よりも不景気を乗り越えることが大切、そうすれば国民生活が向上し安心な生活ができる」という貴夫の考えを聞いて、輝男は「不景気を乗り越えるのは結果であり、政治が信頼され消費税増税が実現し国民生活が充実することで景気が上向く」のだと自分の考えを確認した。また、宙子の「インターネット等で情報のうそが多いから安心できない」という意見には、「現代社会の課題の一つであるが最重要の課題とは思わない」と考えた。

他にも、「理想だけではなく現状やデメリットをしっかりと見つめることが大切。その上で理想的な政策を打ち出すのはとても難しいと実感した」、「人それぞれ違う政策をもつということは、人それぞれ違ったことに安心を感じるということで、これから自分の子どもや孫の世代まで、みんなが安心とじてくれるのか。新しい不安がこれから出てくるかもしれない。それでもなるべく安心を感じられる社会にしていけると良いと改めて感じました。」と振り返っている子どもがいた。

最後に、報知新聞の100年後、科学技術庁の50年後のそれぞれの未来予測の中で、現在、実用化されているものが多いことを紹介した。また、福井県の少子化対策の成果の一因として、県担当課では3人目の子どもに対する優遇策をあげている。それは、採決の結果、第一党となった政党の「3人っ子政策」と共通点があることも知らせた。実現可能性を感じるとともに、社会（国）は自分たちでつくる主体者意識を持ち、これからの公民学習への意欲を持って欲しかったからである。

また、これまでの学習を振り返って、自分の考えに大きな影響を与えたことを輝男は次のようにあげた。

- ・同じ班の皆子の「日本の国民は政治への信頼度が低い」というOECD調査データを聞いて、「増税をするためには政治への信頼が必要」という自分の考えに自信を深めた。
- ・現代社会の課題を見つけるだけにとどまらず、課題解決のための政策まで考えたことで、社会保障の充実→財源不足→増税→政治への信頼と、現代社会を見つめ直し新たな課題を見つけることとなった。
- ・政策によって生じるメリットとデメリットを考えることで、世代や所得の違いなど複数の立場で効果をとらえることができた。(輝男)

このように、コミュニケーション活動を通して、社会的事象を多様な視点から見つめていこうとする中で、現代社会の認識を深めていくことができたようである。

3 省察

(1) 政策評価シートにより、多様な視点から社会的事象を見つめ合う

皆子：消費税を上げた上で3人っ子政策だからさ。

輝男：5班は「消費税を上げて～」というけど、それ自体がめちゃくちゃ大切な政策なんだよ。

皆子：5班にはそれを言えればいいか。他に3班は国債を減らせば経済が安定するっていうけど逆じゃない？

公二：税金をばんばんとすることになるから、逆に不安定になる。そんなこと言ったら僕らもだけど。

皆子：全部の政党の政策が、私たちの消費税増税をやってからじゃないの？

このように、他政党の政策を批判する対話の中で、皆子の「消費税を上げた上で3人っ子政策」から、輝男の「消費税を上げること自体が大切」と、課題解決のための優先順位や重要度がはっきりとしてくる。また、皆子の「国債を減らせば経済が安定するっていうけど逆じゃない？」というつぶやきに対して、公二が「税金をばんばんとすることになるから、逆に不安定になる」と、国債を減らす政策によって生じるであろう影響を他の視点から説明している。しかし、そこで自分たちの政策である消費税増税のデメリットにも向き合うことになる。こうやって他政党の政策を批判的に検討しながら、皆子の「全部の政党の政策が、私たちの消費税増税をやってからじゃないの？」という考えにつながっていく。これは、政策評価シートを使って、「自分たちの課題が国民生活に及ぼす影響」、「その政策は実行可能か、解決可能か」、「政策によって生じるメリットとデメリット」の観点で自分たちの政策を批判検討した学びが活用されたのだろう。こうやって自他の政策を比較しながら、多様な視点から政策を問い直していくことができた。

(2) 探究のプロセスを問い直す

①課題の必然性

「安心な未来社会をつくりあげるために必要な政策を探る」という主題は、子どもたちにとって学ぶ必然性のあるものだったか。

- ・授業が進むと、それだけ内容や考えることが難しく深くなっていったけれど、他の人の意見を聞いて、自分の最初の考えが変わっていくのに気づき、どんどん楽しくなっていました。

(淳子)

- ・「格差」について考えていきましたが、「日本は〇〇があるから無理」とかが多くて大変でした。他の人の考えを聞いて、「なるほど」があったし「ここをこうした方がいい」もありました。日本の未来社会をあまり考えたことがなかったのでおもしろかったです。(沙子)

- ・「原発をどうやって安全で安心なものにするか」というテーマは、大人でも解決するのが困難だと思います。財政、景気、自然環境、他国とのつながりをできるだけ考慮してかかげた政策は、自分でも納得のいくものだったし、班の人たちにもよく理解してもらえたので良かったです。(有子)

このように現代社会を調査し、安心な社会にとって自分が最重要だと考える課題を選び、解決策を吟味していくというという課題に、子どもたちは意欲的に取り組んだ。自分で領域を選択したことで自分にとって身近な問題を追究できたのだろう。また、解決策を吟味していくことで「現代社会の課題を見つけるだけにとどまらず、課題解決のための政策まで考えたことで、社会保障の充実→財源不足→増税→政治への信頼と、現代社会を見つめ直し新たな課題を見つけることとなった」と輝男が学びを振り返ったことは前述した通りである。

②授業のデザインを振り返る

公民学習の導入

本単元では、公民学習の導入単元としての位置づけとなっており、これからの公民学習への意欲付けとなることをねらいとした。少子高齢化にともなう税と社会保障のありかた、環境・エネルギー、政治の安定、つながりが弱まっていることなど多くの社会問題が取り上げられた。輝男は「今回の学習で学んだ日本の現状を念頭に置きながら、ニュース等に接していきたい」としており、本単元で生徒から出てきた課題意識をこれからの各領域の学習で取り上げていきたいと考えている。

社会の主体者意識を育てる

同じ問題意識を持つ者同士で政党を結成し、世論調査を行う。政策（マニフェスト）を作成し、選挙で投票、政党討論会、党首演説会の後の採決というように、政策を実現するプロセスを子どもたちはたどりながら学習していった。この疑似体験に興味を持ち意欲的に学習に取り組んでいる生徒が多かったように思う。また、政策評価シートを用いて自分たちの政策を吟味するようにしたため、「理想だけではなく現状やデメリットをしっかりと

と見つめることが大切。その上で理想的な政策を打ち出すのはとても難しいと実感した」と振り返っているように、社会的な問題を解決することの難しさを感じる生徒もいた。それは、自分が解決していく主体者の立場に立ったから感じるのだと思われる。

しかし、「難しい」で終わってしまい、そこから自分たちで現代社会の課題を解決していかなければならないという意識は強くなかったように思う。では、どうすれば社会を創り上げていこうとする主体者意識が生まれるのか。輝男は、保護者から聞き取り調査を行い、「安心な社会にとって必要なものは、衣食住が安定して足りていることと対外的に平和であること」と聞いてはいたものの、当面する切実な課題まで聞き出したわけではない。生活者の視点で自分に何が出来るかという発想に至らなかったのは当然ともいえる。また、課題解決のプロセスの中で、地域の人や行政担当者の生の声を生かす機会はなかった。これからの公民学習において、外部の人材を生かしたり、身近で具体的な問題を取り上げたりしていくことで、少しずつ主体者意識を育てていきたいと考える。

③持続可能な社会を探る学習を通してロングスパンでつながっていく学び

学びの連続性を保証するために、社会科の3年間のカリキュラムにおいて、持続可能な社会を探る視点（世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困削減、環境の保全と回復、天然資源の保全、公正で

平和な社会）を意識することで、地理・歴史・公民の三分野の領域を関連させながら、より総合的に学びを高めていくことができると考え、学習内容を構成している。こういった学びのプロセスを経て最終的に子どもたちは、3年間の社会科学習のまとめとして「卒業論文」に取り組む。

今回の学習において子どもたちが気づいた現代社会の課題の多くが持続可能な社会を探る視点と関連しており、これからの公民学習において取り上げていきたいと考えている。また、子どもたちが考えた「安心な未来社会をつくりあげるための政策」についてもタイムリーな時期に検討し、具体的な自分自身の問題としてとらえさせていきたい。

参考文献

- 城山英明, 鈴木達治郎, 角和昌浩『日本の未来社会』東信堂 2009
- 向当誠隆「個の学びをもとに協働で探究し、自己と社会を見つめ直す社会科の実践～幸せな未来社会をプロジェクトする～」『福井大学教育実践研究』第32号2007 pp77-85
- 大橋巖「共に生きる社会を創造する学びを支援するモニタリング資料利用法の解明」『第33回福井大学教育学部附属中学校教育研究集会 実践研究資料集』福井大学教育学部附属中学校 1999

Reconsider the practice of teaching social studies will be discussed in contemporary society by a policy of cooperation to build up a secure future society

Katsutoshi Tsukada

Key words : Feature of modern society, Social security, Subject's consciousness, Sustainability, Social Participation, Policy evaluation seat